



11【羽二重回子】日暮里にある店内には、彰義隊士の槍や官軍の砲弾などが展示されている。12【横山家】千住の横山家の柱には彰義隊が付けた刀傷が残る。13【彰義隊の墓】上野にある彰義隊の墓。ここで隊士の遺体が火葬された。14【西郷隆盛像】彰義隊の墓の前に鎮座する西郷像。15【供養塔】千住の円通寺は彰義隊関係の史跡が多く残る。こちらは彰義隊の供養塔。16【大鳥圭介などの数々の石碑】こちらも円通寺。その他「新門辰五郎」や「榎本武揚」らの碑なども見える。17【黒門】これも円通寺にあるのだが、無数に空けられた銃弾の跡が生々しい。18【彰義隊の首塚】面影橋の南蔵院にある首塚。卒塔婆の新鮮さに供養を続けている痕跡が見える。19【六地藏】豊島の「西福寺」にある彰義隊供養の六地藏。



1【北白川宮能久親王像】北の丸公園の北白川宮能久親王像。皇族でありながらも彰義隊らに担ぎ上げられ、官軍と対峙。2【大村益次郎像】「軍神」と称された大村像は靖国神社に建ち、上野を睨んでいる。3【松坂屋】ここが官軍の本営となったという。4【黒門の由来碑】激戦地であった黒門の場所を示す。5【清水観音堂】ここも激戦地であったが、戦火には耐えた。6【穴稲荷】洞窟型の稲荷神社で、彰義隊士はここから不忍池の官軍と対決した。7【日本坊門】輪王殿に移築された旧日本坊門。砲弾などで空けられた穴が当時の戦いの物語を語る。8【寒松院】彰義隊本部であった寒松院。当時は動物園内にあった。9【寛永寺】ここに謹慎した慶喜を警護するため集まった者たちが彰義隊士となった。10【上野戦争の碑】寛永寺内に建つ。

### 上野公園を戦場に戦った彰義隊は江戸っ子の意地だった

今回は江戸で最後まで官軍に抗戦した「彰義隊」をテーマに訪ねてみる。いまいちマイナーに思われがちな彰義隊だが、徳川に世話になった当時の江戸っ子たちは、「薩摩らの芋侍に江戸を好きにされてたまるか」という思いが強く、それに対抗していた彰義隊は「情夫にもつなら彰義隊」と言われた程、人気であった。その彰義隊と官軍が戦った「上野戦争」の戦地こそ、現在の上野公園である。元来、上野公園の地は幕府が建てた寛永寺の一部分であり、全盛期には今の倍ほどの面積を有していたという。

上野戦争が勃発した経緯は次の通り。京都で戊辰戦争が始まると、將軍慶喜は恭順を示し、後を勝海舟に任せて寛永寺に謹慎。海舟は官軍の大将・西郷隆盛と談判して、江戸城を明け渡すことで、江戸での戦争回避に成功したのだ。その結果、徳川の命も守

## 江戸っ子の想いを背負い涙に散った彰義隊!!



ここも激戦地となつておの激戦区である。そして、そのすぐ上にあるのが「清水観音堂（5）」だ。

ここも激戦地となつており、境内には当時の様子が描かれた絵が展示されている。絵の横には当時、使用された弾丸まで飾られているので要チェックだ。さらにそこから不忍池方面に少し行くと、花園稲荷があり、その中に「穴稲荷（6）」という洞窟型の神社がある。彰義隊士はここから銃を構え、不忍池から来る官軍を撃つたという。

次に国立博物館方面に向かうと「輪王殿」があり、そこには「旧本坊表門（7）」が移築されている。当時は博物館付近にあった本坊の焼け残った門で、銃弾などで空けられた穴がリアルに残る。また、この裏手には彰義隊の拠点であった「寒松院（8）」もある。しかし当時はこの場所ではなく、現在の上野動物園内に建てられていた。

### 賊軍として無惨に散った彰義隊は安らかに眠っているであろうか？

そして「寛永寺（9）」ここには「上野戦争の碑（10）」も建てられている。このように少し公園を歩いただけで、多くの彰義隊の一端に触れることができるのだ。ところで官軍の司令塔、大村益次郎であるが、彼は「軍神」と称されるだけあって、さすがに見

られ、慶喜は水戸へと移ることとなった。しかし、幕軍の中、特に慶喜の警護を目的に上野に集結していた一橋家の家臣たちは、この談判に納得せず、断固抗戦を主張する者も大勢いたわけで、その者達を中心に集結したのが「彰義隊」なのだ。彼らは慶喜が水戸へ移った後も江戸に残り、寛永寺の座主「北白川宮能久親王（1）」を担ぎ出して寛永寺に立て籠もつたのだ。

談判約束を果たした海舟と西郷とつて、この彰義隊は非常に迷惑な存在であった。そこに京都の官軍から送り込まれたのが軍事のエキスパート、「大村益次郎（2）」だ。この大村の下、完璧な作戦が作られ、遂に「上野戦争」がはじまったのだ。この時、大村は一番の激戦地となるであろう「黒門口」に薩摩の部隊を配置した。これを聞いた西郷は「薩摩を皆殺しにするつもりか？」と聞き、それに対し大村は「はい」と答えたという逸話がある。このようなエピソードから西郷と大村は不仲

事な戦略で戦いを終わらせたと見える。というのも大村の敷いた布陣図は、戦火が江戸市中に広まらず、上野だけを叩くものとなつており、それは何と「明暦の大火」を徹底調査した上でのものなのだという。また、その布陣の中で、根岸・日暮里方面にはあえて兵を置かず、彰義隊の逃走路を残している。これは、逃げ道を残すことで、彼らに徹底抗戦をさせないための策なのだ。敗戦色が濃くなってきた彰義隊士は、まさにこの逃走口から逃走を始めた。日暮里の有名な団子屋「羽二重回子（11）」の店には、当時、逃走した彰義隊士が、この店の軒下に捨てた刀や槍が展示されている。また、千住にある「横山家（12）」の柱には、逃げる彰義隊が悔し紛れに傷つけた刀傷が残っている。

このように必死に逃走した彰義隊であるが、賊軍の汚名を着せられていたため、その道々はさぞ大変なものであつただろう。また、それは戦死した者も然りで、彼らの遺体は片づけることさえ許されず、上野の山は悪臭に包まれたという。しかし、さすがにこの状態を見かねた円通寺の和尚らが立ち上がり、遺体を収集し火葬したのだ。その現場が、上野の「彰義隊の墓（13）」のある場所だ。墓碑が「彰義隊」ではなく「戦士之墓」となっているのもやはり、官軍をばか

つてのものである。それにしても、この上野の墓であるが、すぐ前には官軍の大将「西郷隆盛像（14）」が建てられており、さらに靖国神社の大村像も上野を睨んでいるという位置関係。墓は官軍に睨まれ、その官軍の西郷と大村は不仲という、この微妙な三つの石像の三角関係は、いろいろ複雑な気持ちを抱かせる。

であつたと言われている。では、実際の戦いの様子はいかがであつたか。結果は散々であつた。近代兵器と大村の戦術により、一〇〇人以上いた彰義隊も、わずか半日で惨敗。上野の山は無惨な死体の山となつた。

それでは、その戦場となつた上野公園を訪ねてみよう。と、その前に、上野公園のすぐ向かいにある「松坂屋（3）」に注目したい。当時は呉服店であつた松坂屋であるが、実はここが官軍の本営であつたといわれているのだ。ここも是非、チェックしたい。

そしていよいよ上野公園へ。入口を入ると、すぐに「黒門の由来碑（4）」がみえ

TOKYO

街に残る江戸の終焉跡

# 幕末歩き

～上野を中心に日暮里などなど～

④②①⑩ 彰義隊

取材・文・構成◎三澤敏博(絡繰堂)

BAKUMATSU WALKING

また、千住の円通寺にはこの遺体火葬の縁から、多くの彰義隊に関する史跡が残る。「供養塔（15）」はもちろん「大鳥圭介などの数々の石碑（16）」。そして、何と、当時の「黒門（17）」までが移築されているのである。見ると、無数の鉄砲の穴があり、激戦地の激しい戦いが非常にリアルにうかがい知れる。

この他にも各地で、逃走した彰義隊士を慰霊する碑は建てられている。面影橋の南蔵院には九人の「彰義隊士の首塚（18）」があり、また豊島の「西福寺」には王子で戦死した六名の隊士を供養した「六地藏（19）」もある。

その他、このように彰義隊を供養した寺は各地にあるが、賊軍とされた彰義隊がこれだけ慰霊されているのも、やはり江戸の人間が彼らに共感し、感じ入る部分が多かつたからではなからうか。土足で江戸に踏み込んでくる官軍に対し、無念に散つていった彰義隊士。そんな姿に江戸っ子たちは哀悼の念を感じざる得なかつたのである。ちなみに、彰義隊の亡霊が現れるという話も各地に残っている。中でも有名なのが御徒町の「NTT上野（20）」の工事だ。震災で焼失した際の再建工事のこと、いつも同じ日に奇妙な事件がおきたという。調べてみると、その日はある彰義隊士が殺された日であり、その場所こそ、彼が隠れていた現場であつたという。すぐに供養がなされ、供養塔が建てられると奇妙な事故はなくなつたのだが、現在でも屋上には慰霊碑があり、命日には供養が行われているという。

